

会 議 記 録			
会議の名称	予算特別委員会		会議場所 全員協議会室 担当職員 鈴木
日 時	平成29年3月22日（水曜日）		開 議 午前 10 時 00 分 閉 議 午後 3 時 30 分
出席委員	◎西口 ○竹田 三上 奥野 山本 平本 小松 福井 菱田 小島 馬場 木曾 <湊議長>		
執行機関出席者	桂川市長、石野副市長、玉井病院事業管理者、田中教育長、藤村市長公室長、木村企画管理部長、田中生涯学習部長、大西総務部長、塩尻環境市民部長、吉田環境市民部市民窓口・保険医療担当部長、栗林健康福祉部長、辻村健康福祉部子育て・障害福祉担当部長、内田産業観光部長、柏尾産業観光部農政担当部長、桂まちづくり推進部長、竹村まちづくり推進部事業担当部長、柴田土木建築部長、中西土木建築部施設担当部長、玉記会計管理室長、西田上下水道部長、橋本上下水道部事業担当部長、佐々木市立病院管理部長、山本教育部長、浦財政課長、石田総務課長		
事務局出席者	門事務局長、山内次長、船越副課長、鈴木議事調査係長、三宅主任、池永主任		
傍聴	市民1名	報道関係者1名	議員10名 (酒井、富谷、小川、奥村、並河、田中、齊藤、藤本、明田、石野)

会 議 の 概 要

10:00

1 開議

〔西口委員長 開議〕
〔事務局長 日程説明〕

〔市長等入室〕

2 第1号議案審査 【市長質疑】

番号	事業名	論点
1	企画推進経費	①官学共同研究委託料について、事業内容を示して予算計上すべきだと思えるがどうか。 ②カーボンマイナスプロジェクト研究委託料について、次の事業展開をどのように考えているのか。
2	文化振興経費	東京オリンピック・パラリンピックに向けた、文化芸術事業補助金事業の「かめおか霧の芸術祭（仮称）」について、具体的にどのような計画で事業を進めていくのか。そして、その取組みにより、どのように亀岡のPRに寄与できると考えているのか。

3	セーフコミュニティ推進事業経費	セーフコミュニティやインターナショナルセーフスクールについて、今後市内での取組みをどのように広げ、事業効果をどのように上げていくのか。
4	公立保育所運営経費	別院保育所は急傾斜地による土砂災害警戒区域に立地している。耐震工事等により現施設を維持していくべきか、今後の方向性を検討すべきではないか。
5	観光推進経費	①「森の京都DMO」の設立により、本市は関係5市町の中心的な立場として、どのように取組もうと考えているのか。 ②「森のステーションかめおか」のハード面整備後における事業運営のあり方をどのように考えているか。(平成28年9月定例会指摘要望事項への対応方針) また、薬草の活用は、薬事法上問題はないか。
6	緑花推進経費	「亀岡まるごとガーデンミュージアム」構想により、今後の運営・維持経費の増大が見込まれるが、事業目的とその費用対効果をどのように考えるか。また、緑の基本計画と整合しているのか。
7	事務局事務経費 学校運営経費	学校再編に向けた関連予算が計上されているが、学校規模適正化の進め方についての教育委員会としての考え方は。また、市長の意見は。
8	京都スタジアム(仮称)関連事業経費	①亀岡市として20億円を投資する、京都スタジアム(仮称)の経済効果、事業効果について、どのように考えているのか。 ②長期的な視野における財政見通しはどうか。 ③スタジアム用地としての妥当性はどうか。駐車場、サブグラウンド、交通アクセスに関して、亀岡市としても積極的に取組まなければならないのではないかと。
9	公園緑地整備事業経費	京都・亀岡保津川公園について、今後の基本的な整備方針はどのように考えているのか。

《市長答弁》

<市長>

1-①

平成22年からこの取組みを進めている。京都学園大学との包括協定に基づく共同研究に係る経費であり、年度当初に亀岡市と京都学園大学で組織する亀岡モデル創生協議会において、研究内容を協議・決定し予算の範囲内で実施している。これまでアラータイモの研究やスタジアムの経済効果、東北への千枚漬けお届けプロジェクト等を実施してきた。成果のあった研究として、「高齢者の運動介入」の研究報告において、介護予防等に効果があり、医療費の削減にもつながることが解明されたと聞いている。今後は、予算計上時に、より具体的な研究内容が示せるよう大学と協議し、改善していきたい。

1-②

平成23年度から3大学(立命館大学・龍谷大学・京都学園大学)の調査研究委託料として計上している。カーボンマイナスプロジェクトは、これまで3大学と事業協定を締結し、研究協力のもと事業を実施してきたところで、

温室効果ガスの削減、ブランド農産品（クルベジ®）の流通・販売、国内外からの行政視察、小・中学校、高等学校での食育や環境教育等、一定の成果を上げてきた。さらに、これまでの取り組みが認められ、国立総合地球環境学研究所が実施する環境と食をテーマにした、世界的研究の研究フィールドに選ばれる等、注目されている。今後は、平成29年度から31年度までの3年間の事業協定で、補助金については、一定の目途をつける方向で考えており、自立した事業として確立させていきたい。

2

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化芸術活動の一環として、かめおか霧の芸術祭(仮称)実行委員会を組織し、京都府の文化振興事業補助金も活用しながら、本市の文化力を生かした地域資源・観光資源の創出や地域課題の解決を図る新たな取り組みとして継続的に実施する予定としている。具体的な内容としては、京都市内の芸術系の4大学、亀岡高等学校の普通科美術・工芸専攻、みずのき美術館、地元自治会等と連携し、学生を中心に、千歳町の空家となっている古民家を活用し文化活動の拠点として、七福神めぐり等、森の京都と連携した活動や、亀岡の霧をテーマにしたイベントの開催に向けた取り組みを進める。また、亀岡の「とかいなか」の魅力をもPRするため、いなか編、まちなか編として段階的に事業を実施する。実施にあたっては、学生が地域に溶け込み、地域に根差した文化芸術活動が実施できるよう地域の自治会や住民と協働で取り組んでいくこととし、地域の活性化、また移住・定住促進にもつなげられるよう亀岡をPRしていきたい。4年間取り組むが、平成29年度についてはいなか編、平成30年度はまちなか編を進める。京都市内の芸術大学の教授やそこを卒業されたアーティストが、亀岡市にはたくさんいらっしゃる。その中の10人位の人と出会う中で、亀岡に縁のある地域の人としっかり連携し、芸術祭につなげていきたい。亀岡全体の文化度を上げていくような取り組みにつなげていく。

3

セーフコミュニティについては、平成20年に国内初の認証取得を行い、平成30年度に再々認証を目指している。現在では、見守り活動を市内各地で実施していただく等、安全・安心への取り組みは、市全体にしっかりと定着している。平成23年以降には、高齢者や交通安全、防犯等の6つの重点課題に対応した各対策委員会を設置して取り組みを進めている。対策委員会を設置する前と比較すると、交通事故件数は53%減少し、街頭犯罪認知件数は52%減少した。また、自殺者数は45%減少する等、大きな事業効果が表れている。また、セーフコミュニティは、こういった数字としての成果だけでなく、多くの市民や団体の方々に参画いただく中で、ドライブレコーダーによる見守りとして、事業所との連携を図るセーフティドライブプロジェクトやまちレコプロジェクトのような、新しい市民参加型の取り組みも進めている。今後もセーフコミュニティを通じて、さらに市民と一緒に協働の安全・安心のまちづくりを進めていきたいと考えている。セーフスクールについては、平成27年10月に曾我部小学校と公立の8保育所及び亀岡あゆみ保育園が認証を取得した。いずれの学校や保育所・園においても、けがの件数は減少し、また、保護者や地域の方も理念に共感いただく中で活動に協力いただく等、大きな事業効果が出ている。小学校での認証取得は1校

だけではあるが、曾我部小学校で取り組んできたいじめフォーラムは、市内の全小中学校が参加する行事となり、各学校が集まる会議でも曾我部小学校の取り組みを発表する等、その成果を他の小・中学校へ広めるように努めている。曾我部小学校では、平成30年の再認証に向けて、児童が自らの考える力の向上につながるよう、セーフスクールの取り組みを進化させようと努めているところである。今後は、取り組みを発展させる中で、有効な取り組みを精査して、他の小・中学校へセーフスクールの効果を波及させていきたい。セーフコミュニティについては、国内初の認証という大きな看板を持っているので、今後の取り組みは再々認証を受けた後に考えていきたい。インターナショナルセーフスクールについては、平成30年度に再認証を受けた後は、再々認証を受けずに独自の活動として、市内小中学校に取り組みを広げていきたい。

4

別院保育所は、立地上心配されている状況もあり、平成25年の再編整備計画案では、移転すべく候補地を検討していたが、どの土地も土砂災害等の危険性があることから、候補地選定に至らなかった経過がある。東別院町は山間地域であり、各集落が土砂警戒区域になり、新たな場所を見つけて移転することは大変難しかった。今年度に改めて検討した結果、亀岡市立保育園再編整備検討会議報告書に示された要件の1つである児童数について、別院保育所は減少傾向にあるとは言えないことから存続し、現施設で安全性を高め使用することとした。これについては、地元自治会及び保育所の保護者に説明し、理解を得ているところである。別院保育所は、土砂災害警戒区域（イエローゾーン）にあり、遊戯室ステージの一部が土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）に入っている。土砂災害防止法において、イエローゾーンに指定されると、避難体制に関する事項を定めることとなっており、レッドゾーンに指定されると居室を有する建築物の建築行為は、建築確認が必要となる。現在の使用については、法令上の問題はないと考えている。避難体制については、昨年6月に避難行動マニュアルを策定し、警報が発令された時点で保護者に迎えを連絡し、京都府土砂災害警戒情報システム危険度レベルが、レベル1を超えた場合、避難行動を開始することとしている。昨年10月31日には、マニュアルに沿って自治会の協力をいただきながら、児童と職員が訓練を実施した。今後、さらに防災意識を高め、入所児童の安全確保を最優先に避難行動がとれるよう徹底していく。

5-①

森の京都DMOは、地域の多様な関係者が連携して観光地域づくりを行う組織である。これまで主体的に広域観光行政を担う組織がなかったことから、京都府では、観光地域づくりの中核組織として、森の京都エリアの特色を生かした観光地経営を行うため、一昨日、3月20日に「一般社団法人森の京都地域振興社、森の京都DMO」を設立され、その総会に私も参加した。京都府と5市町の福知山市、綾部市、南丹市、京丹波町、亀岡市で連携する森の京都DMOの活動基盤としては、本年度から、マーケティング調査や地域資源を活用した旅行商品の造成、総合ウェブサイトの構築にも取り組まれている。来年度の森の京都DMOの具体的な事業については、農村体験旅行受け入れの充実強化やエコツアーリズム、観光ガイドをはじめとする観光人材育

成、ジビエや京野菜等地域特産品のブランド化等、各地域の特色を生かした事業展開が計画されている。森の京都DMOの事務所は、森の京都の玄関口となるJR亀岡駅前に設置され、(一社)亀岡市観光協会と一緒の建物の中にある。1階が観光協会、2階が森の京都DMO事務所として、4月1日に開所される予定で進められている。本市としては、観光地域づくりの総合プロデューサーであるDMOが持つネットワークや様々なノウハウについて、本市観光協会が共有し、それを吸収・活用することによって、観光推進体制の一層の強化につながっていくものと考えている。今後とも、DMOが地域の観光集客の核となり、本市においても、森の京都エリアをリードしつつ、観光産業の拡大、地域全体の活性化につなげていきたいと考えている。

5-②

森のステーションかめおかは、今年度の国の地方創生の交付金を活用し、鋭意事業を推進している。交付金対象期間である平成30年度までは、基礎的な施設整備や集客のためのプロモーション等を積極的に展開し、新たな観光資源の発信拠点として、基盤を整備する予定としている。補助金交付の最終年度である平成30年度までには、運営主体が自立できるよう地域の特産品である天然砥石や薬草等を活用し、6次産業化の展開や体験観光を企画するとともに、京都府等を通じて、事業展開や経営戦略に関わる専門家、アドバイザーを派遣する等、積極的な支援を行い、足場を固めていきたい。薬事法の関係として、地域資源の1つであるチョロギについては、食用以外に古くから漢方薬として重宝されてきており、最近ではマウスによる実験で脳細胞を活性化する成分が含まれていることがわかる等、認知症予防に効果があると期待されている。京都府南丹保健所と調整した結果、薬事法の課題はないものの、健康増進法上のチョロギ製品に認知症に有効と表示することは、誇大広告に該当する恐れがあり、不適切であると認識している。今後、チョロギを特産品として売り出し、支援していくためにも消費者の誤解を招かないよう、的確な情報提供に努めていきたい。

6

亀岡まるごとガーデン・ミュージアム構想の事業目的としては、ウェルカムガーデンの整備等のハード事業と、さくらまつりやオープンガーデン等のソフト事業といった、ハード・ソフト事業の組み立てにより、緑だけでなく、市の文化や史跡、自然等をまるごと体感できる事業を通じて、市民とともに緑を生かした景観を創出し、ふるさと亀岡への愛着による定住促進につなげ、また、にぎわいを創出し、交流人口増加による観光面での経済効果を目指すものである。なお、事業によっては、今後の運営・維持に係る経費が必要となるが、市民力を活用し、市民や各種団体との協働による仕組みづくりにより、最大限コストを抑えていきたいと考えている。また、緑の基本計画との整合については、緑の基本計画は緑地の保全や緑化の推進に関して、その目標等を総合的に定めた緑に関するマスタープランである。今回の亀岡まるごとガーデン・ミュージアム構想は、その実現に向けて、亀岡の美しい風景づくりや魅力ある地域の宝を創造するための事業提案を、具体的なアクションプランとしてまとめるものであり、整合は図れていると考えている。

7

現在は、亀岡市学校規模適正化基本方針に基づき、短期的取り組みに位置付

けた別院中学校ブロックと東輝・詳徳中学校ブロックでブロック協議会等を立ち上げ、意見聴取や情報共有を進めている。別院中学校ブロックでは、東・西別院小学校は特認校制度を導入して存続させ、別院中学校は平成30年4月から南桑中学校へ編入する案を、また、東輝・詳徳中学校ブロックでは、平成30年4月から小学校及び中学校の校区を見直す案を示し、地域に出向いての説明会を開催しているところである。現状では、理解いただけている状況には至っていないと、私も認識している。今後、示した案について、保護者や地域の皆様からいただいた意見や要望を踏まえ、見直し等が必要な部分は修正しながら、理解いただけるよう丁寧な説明を心がけていく。別院中学校ブロックに係る関連予算を計上しているが、この経費は学校を移っていただく生徒の心配や不安の低減、保護者負担の軽減を図り、円滑に学習や学校生活を送れる環境を整えるための経費である。仮に別院中学校から南桑中学校への編入を進めていく場合でも、まずは、生徒に南桑中学校の雰囲気・様子等を知ってもらい、どのように感じているのかを確かめていく必要があると考えている。また、学校指定物品の支給内容を、保護者に具体的に示すことができるので、理解につながっていくものと考えている。交流事業等の実施にあたり、PTAや地域の皆様に説明し、理解いただいたうえで進めていきたい。目標年度を定めている中で、別院中学校においては、南桑中学校への編入を大きな目標としているが、保護者からは亀岡中学校への編入という意見も出ており、しっかりと意見を聞く中で、子どもたちの状況に応じて、取り入れる状況であれば取り入れていきたいと考えている。まだ、議論が足りない状況であると認識しており、しっかりと進めていく中で、皆さんに理解をいただける方向にしていきたい。

8-①

スタジアムが建設されることによって、スポーツを通じた青少年の健全育成はもとより、亀岡駅北土地区画整理事業や保津川かわまちづくり等の事業との連携で、JR亀岡駅を中心とする駅都市核の形成の促進に大いに繋がると考えている。スタジアム整備に伴う経済効果については、建設予定地が亀岡駅北土地区画整理事業地に変更になったことにより、民間活力と融合した施設整備や年間利用日数の増加等、多くのにぎわいを生み出す利用が考えられるので、亀岡市にとってより大きな経済効果が得られるよう、経済界等としっかり連携して取り組んでいきたい。京都・亀岡保津川公園でのスタジアムから、昨年8月に区画整理事業地内に移動することを表明したことによって、経済効果がいっそう高まるということが言えると考えている。民間投資をより促せば、いっそう効果的になる。駅北、駅南にもその効果が波及できると期待するものである。

8-②

亀岡市が負担する新たな用地取得費の20億円は、起債制度を活用し、全額市債によりまかなうこととしており、一般財源、財政調整基金繰入金等は充当していないところである。当該市債発行の影響については、平成29年度以前の5年間の当初予算における市債の額を比較すると、平成26年度は44億9千万円、平成27年度は42億7千万円であり、平成29年度の43億7千万円が突出して多額ということではない。将来見通しとしては、20億円の市債発行が財政運営に大きな影響を及ぼすものではないと考えている。

健全化判断比率では、財政健全化指標の1つである実質公債費比率は、平成27年度は11.3%で、早期健全化基準の25%を大きく下回っており、20億円の市債発行によってもこの基準を上回ることはなく、財政健全化団体になることはない。また、将来負担比率においても、平成27年度は149.2%で、今後においても早期健全化基準の350%を上回ることはない。平成29年度に20億円の市債を発行し、元利均等で10年償還、その内はじめの2年間は利子のみとして試算すると、実質公債費比率に影響する値としては、3年度に約1.6ポイント増加する。また、将来負担比率は、借入初年度に最大で約13ポイント増加すると見込むが、その後元金償還が進むと、約1.6ポイントずつ下がっていく。臨時財政対策債を除く市債発行は、平成29年度当該用地に係る20億円の発行により、市債残高は大きく増えることはない。約2億5千万円の増加見込みで、その後は減少していく見込みであり十分負担しえる金額であると考えている。今後、普通建設事業に係る新規の市債発行について、年度ごとの公債費における元金償還額を原則上回ることはないよう、可能な限り抑制し、持続可能な財政運営に努めていきたい。

8-③

今回、亀岡駅北土地区画整理事業地にスタジアムが建設されることとなったことにより、駅前の商業エリアから連続した形でスタジアムにも商業施設が計画され、従来からの保津川下りの観光客に加え、新たなスポーツ観戦者によるスポーツ観光、また新規居住者を迎え入れる基盤が整備されるもので、定住人口、交流人口を合わせて誘導していけるものと考えているところである。駐車場については、関係者駐車場はスタジアム内に確保されるが、一般来場者駐車場は、京都府と連携する中で調査を行い、必要に応じ臨時駐車場等の確保に関して、周辺用地の利活用を含め検討していきたい。サブグラウンドについては、亀岡駅北土地区画整理事業地においては計画されていないが、亀岡市としては、必要に応じて、亀岡運動公園等との連携も考えていく。交通対策については、JRをはじめ、バスやタクシー事業者と連携し、でき得る限り公共交通機関を利用していただけるような仕掛けづくりが大切であると考えている。あわせて、京都縦貫自動車道の亀岡インターチェンジから府道郷ノ口余部線を結ぶ（仮称）国道372号バイパスの整備をはじめ、国道9号の渋滞を緩和するために、本市としても市道北古世西川線や中矢田篠線等の市民の生活道路等の整備に取り組んでいる。今後、京都府の実施設設計が完成する等、事業がどんどん具体化していくので、亀岡市としてもこれまで以上に積極的に取り組んでいきたい。

9

環境保全専門家会議において具体的にアユモドキの保全・繁殖、今後の保護保全施設をどのように形成していくのかという観点を主眼に、水田環境の実証実験を継続し、その結果を踏まえながら調査・検討いただいております。現時点では、公園施設の具体的な計画策定までには、しばらく時間を要するところである。その状況において、公園の基本的な整備方針としては、屋外における休憩、運動等のレクリエーション活動や、農業体験等も含めた综合利用による、にぎわいと交流を創出する場としてアユモドキの保全を念頭に、生物多様性確保のための保全施設を配置し、保津川や隣接農地、背景の山並み、また、駅北区画整理事業による新たな街並み等周辺との景観にもマッチした

魅力ある公園として、自然との共生を基本コンセプトとして考えている。

<教育長>

7

基本的には市長から答弁した通りであるが、市内周辺部では児童・生徒の減少により、小規模校化が進み複式学級となっている学校がある一方で、中心部では児童・生徒数が急増している学校もあり、それぞれに教育上、また、学校運営上の課題を抱えている状況にある。この中で、学校規模適正化の基本方針に基づいて、子どもたちのよりよい教育環境を維持する視点に立ち、短期・中期・長期の取り組みを進めることとしている。具体的には、平成28年度から、別院中学校ブロックと東輝・詳徳中学校ブロックの2つの中学校ブロックで取り組みを進めてきたが、どちらのブロックでも対象となる地域の住民や保護者の皆さんから、教育委員会が示している案については十分理解いただいている状況ではないと認識している。今後は、これまでの説明会等でいただいた意見や要望を踏まえ、必要な見直しや修正等を行い、地元にも協議しながら進めているが、理解いただけるように、丁寧な説明をしていきたいと考えている。

10 : 34

<<質疑>>

<西口委員長>

質疑は一問一答方式で、1項目につき1委員3回までとする。

1

<木曾委員>

京都学園大学が京都キャンパスに移転することに急遽対応するため、官学共同研究の件が出てきた経過がある。今までの経過については、よくわかっているが、この内容は大学に任せきりの部分もあり、年1回の報告があるだけであり、議会でも指摘されてきた。金額的なことも含め、徐々に改善されてきており、官学共同研究が悪いということではないが、内容を決めてから予算計上すべきだと質疑した。予算は必ず根拠があるものであり、それを示していただきたい。

<市長>

今回は50万円の予算を提案しているが、この後、亀岡モデル創生協議会と意見交換し、決めていくことにしている。本来なら、この事業を実施するためにこの予算が必要だと提案すべきだが、これまでそういう状況になっていなかったものを引き継いできたことは申し訳なく思う。平成28年度からは、私をはじめ、各部長、京都学園大学の総長、学長、教授と2度ほど意見交換し、いくつもテーマが出てくる。今後は、事前に会議を開いた結果、こういう内容であるため、その予算として、30万円、50万円、80万等が適当なのかという議論が必要だと考える。次年度以降、引き続き実施することになれば、事前に内容を精査し、議会に提案させていただきたいと考えるので、今回については、まだ決まっていないということでお許しいただきたい。

<木曾委員>

官学共同研究は必要であり、充実していくべきだと考える。しかし、もう少し充実した内容を提案いただき、必要であれば金額を増額してでも提示すること

が必要だと考える。今後、十分に協議していただきたい。

<福井委員>

カーボンマイナスプロジェクトについては、後3年で目途をつけるという答弁であった。先進的で素晴らしい取り組みであるが、3年を目途に自立させていくということであった。どうなったら自立だと言えるのか。

<市長>

温暖化に関わるもの、特にクールベジタブルは太陽光発電を設置し、竹炭を含めた製品として生産しており、通常価格より高く売れている。その収入を今後その事業に充てていくものである。このようなものから財源を生み出して、それを運営費に回していくという形で、独自採算できるよう指導していきたい。また、国内外からの視察についても、参加料をいただく中で取り組みを進めていかなければならない。いつまでも補助金を出していくべきものではないと考えており、ある程度目途をつけた中で、どのような形で最終的に自立できるかの方向性を、3年間の中で確立していきたい。

2

<木曾委員>

かめおか霧の芸術祭（仮称）は、亀岡をPRしていく非常によい構想だということがわかった。2020年を目標としているが、せっかくよい発案であるので、もう少し具体的に亀岡市民にPRしていく方法がないのか。わかりやすくするための仕掛けが必要なのではないか。

<市長>

1つは亀岡に縁のあるアーティスト、人材を発掘して横のネットワークを作っていこうというものである。それにより、市政に対するアドバイス等につながっていくのではないかと考える。また、亀岡には世界的に有名な方がいる。先般もアーティストのくるりにお会いした。そのような人たちをネットワーク化していこうということが、実行委員会をつくる1つの目標である。もう1つは、亀岡の魅力は「とかいなか」であり、いなかとまちなかというイメージがある。平成29年度は、千歳町毘沙門の古民家を活動拠点として、大学の教授や学生、高校生等で、芸術活動を行うプロジェクトを立ち上げる。できれば、それを発表する取り組みにつなげていきたい。森の京都のテーマでもある七福神と連携させていく形でいなかをPRしたい。平成30年は、まちなかということで、市内の古民家、町屋、みずのき美術館、ギャラリーおほもと等と連携しながら、制作活動を発表する場をつくっていきたい。亀岡祭と一緒に開催しながら、多くの人に新たな亀岡の文化活動を知っていただき、また、地元にもこのような芸術家、アーティスト、陶芸家、作家がいることを知っていただきたいと思っている。亀岡の魅力を高めながら、古民家を会場として活用しながら取り組んでいけないかと考えている。芸術、文化をより高めていくことで、市民の意識をより豊かにする取り組みにつなげていきたい。市内のカフェにも芸術作品を飾り、それを見て回っていただくような取り組みとも連動する中で、文化活動を横に広げていきたい。2020年を目標として、霧の芸術祭を開催し、広く内外から人を呼び込める形に作り上げていきたい。

<木曾委員>

市民にPRしていくことが大事だと思う。特に文化活動のネットワークを利用する考え方については大賛成である。くるりの佐藤さんは、私の娘と小学校、

中学校の同級生であり、私が小学校のPTAの会長をしたときの在校生なので懐かしく思っている。子どもたちが地元で活躍できる場面を発信していただきたい。亀岡市はPRが下手だと思うので、もっと色々な媒体を使ってPR、広報していかないといけない。

<市長>

よいことをやっても、それを広げていかないと意味がないので、PR、広報に力を入れていきたい。キラリ亀岡おしらせは、全体で4割の方しか見られていない。若い人はあまり目を通さない。現在、積極的にフェイスブックやツイッター、インスタグラムで発信している。このようなことをもっと強化しながら、地元ならではの情報を発信していきたい。また、来年度はカフェに亀岡市の情報を置くような取り組みも実施していきたい。若い人たちが集う場所に、紙ベースも含めた情報発信をすることにより、まずは市内の人に知っていただき、インターネットでは積極的に外に向けて発信していきたい。

<小松委員>

特に亀岡の若い人たちにとって、文化芸術の発表の場は非常に大事だと思う。かめおか霧の芸術祭（仮称）の、いなか編、まちなか編を霧とどう結びつけていくのか。

<市長>

私は、亀岡の芸術家の最たる方は、円山応挙だと思う。円山応挙が亀岡市曾我部町で生まれ、芸術性を身につけ確立していったのは、亀岡の自然環境、霧も含めた情景があって、芸術性を完成させていったのだろうと思う。芸術家にとって、霧は大変魅力的だということである。この間、10人ほどの陶芸家等とお会いする中で、霧に対して大変よいイメージを持っておられることがわかった。ピンチをチャンスに変えるということも含め、亀岡にとって今までは、霧は邪魔でありあまり好まれなかったが、見方を変えると魅力的で芸術要素があふれるものだという事である。このようなものを積極的に発信していくために、亀岡ならではの霧の芸術祭が1つの案として出てきたということである。雲海テラスを整備することによって、自然の芸術を見ることができる。そういったものにつなげていける要素があると考えている。

<馬場委員>

ネットワークは重要だと思う。中矢田町に民間の作品を発表する所はあるが、亀岡市には発表の場が非常に少ない。少ないからこそ、民間、公的なものを含めたネットワークづくりをどのようにしていくのか。

<市長>

活動の場が大変重要である。芸術家の人たちと話をすると、亀岡旧商工会館は、レトロ感等、非常に素晴らしいとおっしゃる。それと同じように、芸術家の皆さんは、古民家や市内であまり活用されていない施設に大変着目されており、そこに亀岡らしさの要素がある。公共施設では、それらを活用できるようにしていきたいが、民間の施設も十分活用していただきたいと考えている。新たに作ることは、簡単にはできないが、今あるものの中で、皆さんが目もくれないような価値がないと思われるものも、見る人が見れば大変魅力的なものが、亀岡にはたくさんある。そういうものに光を当てて、人を引き寄せていく取り組みにつなげていきたいと考えている。

<馬場委員>

確かに魅力的であると思うが、耐震補強等には注意しなければならない。

3

<福井委員>

栗山市長時代に、セーフコミュニティを再認証する際、事故が減った等たくさん成果を出してもらったが、その間にノウハウを吸収し、3回目はやらなくてよいのではないかと、という市議会の議論があったことはご存知か。

<市長>

その議論があったことは承知している。

<福井委員>

3度目のセーフコミュニティ認証を目指すということだが、インターナショナルセーフスクールは、2回目は更新し3回目は更新しないということであった。インターナショナルセーフスクールは、これだけ成果があるのであれば、小学校全校でやってみてはどうか。

<市長>

成果は着実に出ているが、学校や幼稚園の現場に行くと、これに伴う事務が大変だという意見がある。今年度、公立保育所にパソコンを配備するが、今までは、園長等の分で2台程しかなかった。インターナショナルセーフスクールの報告書を作るために、そのパソコン使用を順番待ちしており、単独でパソコンを増やそうと考えている。事務作業が大変だということを勘案するとともに、1校あたり何百万円という予算があるので、平成30年度に再認証を取得した後は、6年間の実績を基に広げていくが、認証取得はしない。セーフコミュニティは、日本で初めて認証取得しており、今度、世界大会が厚木市で開催される。亀岡市は、セーフコミュニティを認証取得している所と、広域連携により災害協定を結んでいるので、それをどうしていくかも検討しなければならない。まだ、日本でセーフコミュニティに取り組んでいるところが増えてきていない状況の中で、亀岡市が抜けることで打撃があることも勘案し、まずは、再々認証を取得していく。再々認証を取得した後は、一度検討する必要があると考えている。インターナショナルセーフスクールは再認証を取得した後は、認証を受けない方向で進めていきたいと考えている。

<福井委員>

前市長が実施され、非常によいと思う。けが人が減った、地域で見守り隊ができた、協働につながったこと等の事業効果については事実であるが、取得費用がかさみすぎている。セーフコミュニティが、各地域に根ざしていけばよいが、成果が出たということが市民には知られていない。セーフコミュニティのまち同士で、災害協定を結ぶことも非常によい話だと思うが、広がりや理解が得られなければ、800万円についても理解されないのではないかと。インターナショナルセーフスクールは、1校8園だけが実施して広がらないのであれば、データが出てこない。やるのであれば増やせばよいが、800万円もかけて成果が出ないならばやめればよい。成果が出たというならば、再認証せずに引き継げばよいということになる。

<市長>

もちろん、費用対効果の面もある。セーフコミュニティの事業自体が地味であり、PRがうまくできていないことが課題だと思っている。そこは、しっかりとPRしていくことが必要だと考える。日本初の認証を受けたことは、それな

りに優位性があると思っており、日本のセーフコミュニティをリードするまちとして、もう少し堅持していく必要があると感じている。インターナショナルセーフスクールは、広げていこうと考えており、小・中学校に広がってきていると考えている。しっかり取り組んで、もう1度認証していただき、着実に次の成果につなげ、市民にアピールできるようにしていきたい。

<三上委員>

セーフコミュニティ、インターナショナルセーフスクールの認証を取得することは、それなりのステータスがあることになり、その傘にいることの大事さもある。評価を受け、それなりに成果が出ているのであれば、その傘にこだわらず、そういうところから評価を得たまちであるということで、独自の安全・安心の取り組みをしていけばよいと思う。学校も、けがや事故が減ってきているというが、それを広げていくことに関して、曾我部小学校の教職員が外に向かって発信するだけの余力はあるのか。保育所8園の保育士は、朝から晩まで大変な勤務をされている中で、認証を広げていくというより、評価を受けたことを大事にしていかないと、余分な事務が増えると思う。教育委員会から、超過勤務の実態に伴い、事務員の面接は1人しかしていないというアンバランスな状況も聞いた。職員の労働実態をみて、本当に無理はないのか。私は、再認証取得せずに、その精神を発信する方がよいと思うがどうか。

<市長>

インターナショナルセーフスクールは、認証を受けてまだ3年目であるので、もう少し実績を積む必要があると認識している。6年というスパンを考えているが、それ以上については、独自の形で進めていきたい。平成30年に再認証を受けてから、しっかりとランディングできるようにしたい。亀岡市は、以前にISOを認証取得し、現在は職員の中で独自の形で継続しており、そういう形にできると思っている。セーフコミュニティは再々認証を、インターナショナルセーフスクールは再認証を受けたいと思っている。受けた後、定着できるように進めていきたい。

<三上委員>

職員の労働実態との関係は。

<市長>

教職員には授業だけではなく、日々多様な業務がある。インターナショナルセーフスクールが入ることで、資料づくり等の手間がよりかかるので、今後、軽減しなければならないと思っている。

<小松委員>

来年度は事前審査、再来年度は本審査となるが、経費は審査を受けるために絶対必要なものであるのか。なくてもよい経費はあるのか。

<総務部長>

余分な経費は一切ない。必要最低限の経費である。通訳業務の委託等を計上している。

<木曾委員>

ISOは認証取得して、現在は違う方法でやっている。何が一番原因かということ、膨大な資料が必要となることである。民間の事業所でもそうだが、認証取得等には膨大な時間と資料が必要となる。せつかく市長が違う方向でまちづくりを考えているのに、そういうことはなくしていかないと、違う方向になって

しまう。なぜ、中学校にインターナショナルセーフスクールを入れなかったかというと、中学校では無理だとわかっていたからである。これも考えて、きっちりと取り組んでいく方がよいと考えるがどうか。

<市長>

膨大な時間と労力、資料作成、予算が必要となり、どこかで線を引かなければならないと思っている。先ほども申し上げたように、インターナショナルセーフスクールについては、再認証を受けて終了していきたい。セーフコミュニティについては、再々認証を受けた後に再度判断していきたい。

<奥野委員>

亀岡市は再々認証と言っているが、全国的には増えていない。増えていない原因について、どう分析しているのか

<総務部長>

セーフコミュニティについては、14市町に増えていっている。この取り組みは、全国的に広まっていると認識している。

<市長>

先ほど私が増えていないと言ったのは、実質10年近く経つが、まだ14市町ということであり、本来は20、30と増えていってもよいと思う。事業が地味なので、各市町村の取り組みがそこまでいってない。結果として、医療費の削減や、住民の安全・安心、事故防止を考えると、効果は大変大きいと思う。そこをうまくPRできていないことを、先日のセーフコミュニティの全国会議で言った。これによって素晴らしいまちになることを、もっとアピールしなければならないと思っている。うまくPRできていないことが、大きく広がっていかない原因だと思っている。

4

<平本委員>

別院保育所は、土砂災害警戒区域に含まれている。前期において、この立地はいかがなものかという議論があったが、今回、耐震工事をされる。以前の再編整備で、統合という話もあったが、現在はどのように検討されているのか。

<市長>

別院保育所は、すぐに子どもが減る状況にはないので存続としている。統合については、現在のところ考えていない。土砂災害警戒区域に入っていることについては、すでに地元と協議している。地元からすれば、みんなそういう所に住んでいる。川と山の境に家が建っているのが現状であり、保育所が移転しなければならないのであれば、家も移転しなければならないということである。これを前提とするならば、より安全確保を充実させようということで、避難マニュアルを策定し、避難訓練を実施している。土砂災害警戒区域であり、雨が降った時に懸念されることについては、警戒レベル1で避難するという一方で、保護者にも説明し、地元にも理解を得ている。

<平本委員>

今後の明確な計画はあるのか。

<市長>

現時点では存続していく。今後、児童数が激減するような状況になれば、考えていく必要はあるが、今のところそのようにはなっていない。

<木曾委員>

急傾斜地にあり、家もそういった所に建っていると市長の答弁にあったが、地域の方も大変である。公立保育所は公的機関である。保育に関して、園児の生命を確保する点からも、大きな意味合いがあると思う。ここに踏み切る中で、地元との協議があったとは思いますが、市議会として、決算特別委員会の時には、ここには馴染まない、違う場所に移転すべきだと方向性まで出した。それをあえて耐震としてやるが、ここで議論した内容が反映されないことになると、議会としても難しい決断をすることになる。だめだと言いながら、予算を認めてしまうと矛盾が出てくるが、どのように考えられているのか。

<市長>

議会から指摘を受けたことは重々承知している。今後の別院保育所のあり方は、別院小学校のあり方にも関わる。基本的に、小学校は地域のコミュニティであり、なるべくなくしたくないということで、小規模特認校にして新たに3名入学いただくこととなった。場所移転も検討したが、あの地域の中で見つけるのは大変難しい状況がある。今は園児を確保できるが、その後を見通せない部分があり、新たに建てて統合しなければならない程、子どもが少なくなった時に、行政的に投資のあり方を問われることになる。別院保育所はまだ、トイレも水洗化されていない。旧来型の便槽を持っており、衛生上の問題も指摘される。川に汚水が流れていくことにもなるので、環境的にも改善しなければならない。今回、簡易水洗の改修をしながら、最長10年ぐらいいけるようにしていく。今後、3年や5年という節目の中で、あり方を考えていかなければならない。一度に移転や統廃合にはならないということで、この結論に至った。

<木曾委員>

やむを得ないという理解をされたと思うが、最近は異常気象が多く、特に能勢町から東別院町、篠町にかけては、気象条件的にも雨雲が発生しやすい場所にある。柏原の水害が起きた時も、ちょうどあの辺りに大きな雨雲が集中して張り付き、集中的に雨が降って、大きな災害が起きた。今まで経験したことのない災害の伝承を、我々がしっかりと受け止めないと、大きな禍根を残してしまうことが心配である。判断されたことは、ベストとは言えないがベターだと思う。そういう問題があることは、行政として捉えていただき、議会で議論されたことを認識されないのだめではないかと思う。

<市長>

環境や気象状況に応じて、大変厳しいことがあると認識している。避難体制を含め、危機管理体制をいっそう強化し、そのような懸念があるときには即座に行動、避難する体制を整えて、地元にも協力いただけるとお聞きしている。現状の運営で進めていきたい。

<木曾委員>

あの場所は、前に山や川がある。子どもたちが急遽避難するのは、非常に難しい環境にある。雨がやんだので土砂災害はないというのではなく、土砂災害警戒情報が出ている時は、十分に対応していかなければならない。

<市長>

緊急的な場合は自治会に一時避難する。先般の10月の避難訓練も、先生が車で園児を自治会まで避難させた。最大限の対応をしていくことが大前提である。保護者が来るまでにはタイムラグがあるので、それにも対応できるようしっかりと取り組んでいく。

<小松委員>

昨日は現地視察に行き、ユニークな取り組みだと思った。利用されるのは大阪等、他府県の人も見込まれるが、亀岡市としてどのようにPRしていくのか。

<市長>

森のステーションは、森の京都の入り口として、国の地方創生交付金により交流会館の1階を匠ビレッジ天然砥石館、2階をチョロギ村として整備を進めるものである。企業版ふるさと納税により、野草原を整備していく予定もある。新たに補正予算でも計上したが、ログハウスの宿泊棟も設ける。PRはしっかりとしていかなければならないが、一義的には亀岡市民に使ってほしいと考えている。地球環境子ども村としっかり連携しながら、行政として体験的な学習の場、地域の宝を発信する場として、しっかりとPRしていく。インターネットや広報媒体も含め進めていきたい。森の京都DMOにもしっかりと位置づけて、4市1町の拠点として活用していけるよう、連携することが必要である。

<小松委員>

地球環境子ども村は、主に子どもを対象としているが、せっかくフィールドがあるので、環境について広く考え、連携し、結びつけてやっていけたらよいと思う。要望としておく。

<馬場委員>

3世代住み続けられる地域としてがんばっていこうという思いが、まちづくりの中心になっていると感じた。駐車場の台数があまりない点に関しては、どう考えているのか。

<市長>

バス交通はあるが、何本もある訳ではないので、どう強化するかを考えていかなければならない。ここは、ムラタの森とも連携しており、グラウンドに駐車できる体制をとっているので、400台から500台近く停められる。事前調整の中で進めれば問題はないと思っている。将来的には、バス交通がもう少し充実すればよいと思っている。現在、京都府により鳴滝工区を進められており、今後、利便性がより高まっていくと期待している。

<馬場委員>

1個150万円する砥石の現物を見てきた。価値のあるものであり、伝統技術の継承という点で助成する考えはあるのか。

<市長>

砥石は亀岡の貴重なものであり、今年度のふるさと納税でも20個ぐらいは出たと思う。そういった側面で応援していると思っている。匠ビレッジとして、技術や技を生かしていく場にしたいと考えている。また、陶芸や大工の張娜使いもそこに入る。それらを実演して体験できる場として提供しながら、市民や市外から来る人に見ていただきたい。イベントを通じて、色々な取り組みをアピールしながら、京都、丹波、亀岡の技と技術、文化、伝統を発信できればと思っている。

<馬場委員>

技を持つ和食の職人や和包丁等が適していると思うが、丹波の食材を使って何か実施する考えはあるのか。

<市長>

波及効果が出るような取り組みにつなげていくことを考えたい。体験教室を提案する等の取り組みにもつなげていきたい。

<木曾委員>

森のステーションに現地視察に行き、興味を駆り立てられた。元々、そこは大学を誘致し、廃校になった所である。その後、田中市長時代に地球環境子ども村になり、色々な取り組みをされた。今回は正念場だと思う。今まで、神前区との賃借の関係も含め、莫大な経費を市が出している。神前区として実施したい思いがあると思うが、そこに支援するのであれば、今まで賃借料で払ってきた代わりに、実際にできるかは別としても、市としてはこの部分をやるという話をしなければならぬのではないか。この先、地方創生交付金が切れてしまったら、財源はどうするのか。継続できるかも含めてだが、市がそのような施設を建ててしまうと、維持管理をしなければならぬと心配する。この点で何か構想はあるか。

<市長>

今年度は、賃借料を大幅に見直しさせていただいた。亀岡市としては、この取り組みにより、地元のチョロギをまちおこしの場として提供していくものである。そこに投資するということで、今後も随時見直ししながら、市民力で未来をつくるために、市民や地域に協力いただきたい。この予算については少し縮小しながら、取り組みを進めていく。

<木曾委員>

地元の活性化のためにやっていただくのはよいが、行政としてもどこまで関わっていくのか。自立できるようになってきたところで、非営利法人に任せるようにしないと、延々と補助しなければならぬと心配する。その辺をきっちり整理していただけることでよいか。

<市長>

そういう思いで取り組みを進めているので、今後、地元とも協議をして進めていきたい。

<山本委員>

昨日、現地視察に行き感じたが、対象に限られるのではないか。外国の方や年齢層が高い方になるのではないかと感じた。地球環境子ども村も含めて、子どもたちがそこを利用できるようなことも考えていくべきはないか。市も関わって意見も言っていけないと、今後、継続していくのが難しくなるのではないか。子育て世代も取り込んでいけるような考えはあるのか。

<市長>

あの場所をどう生かすかという問題であり、体験型プログラムを構築して、子どもたちが色々なフィールドで活動していける場をつくっていきたい。ログハウスができると宿泊ができる。宿泊体験で学習プログラムを取り込んでいけると、大変魅力的になると思う。市外からも要望はくると思うが、子どもたちがムラタの森も活用しながら、チョロギ村や匠ビレッジで、体験プログラムを通じて、色々な経験ができるよう、市としても積極的に推進していきたい。

6

<福井委員>

ウェルカムガーデンやスポットガーデンをつくるだけでなく、ソフト面で交流人口の増加を目指すということであった。また、緑の基本計画とは整合してい

るということは理解した。しかし、庭園をつくるときには交付金がついてくるが、その後は、緑花推進経費の中に毎年植替えや庭の管理が出てくる。年々、負担が増えていくのではないかという観点で質問した。それについて、市長は協働の仕組みを考えて、なるべくお金をかけないようにしていきたいと答弁されたが、どういうことなのか例示していただきたい。

<市長>

ニチコン前のボーダーカラーは、ニチコン、亀岡・花と緑の会、緑花協会、自治会の協力を得て管理している。西つつじヶ丘の歯科医院の交差点前も同じような形で取り組んでいる。そのように市民参加で管理していく必要がある。緑花協会へは、基本的に市の公園や街路樹の管理を委託しているので、経費としては多少増えるかもしれないが、日常の作業は、市民参加で協力してもらおうと考えている。草の管理はしなければならないが、1年草を多用するのではなく、基本的には宿根草や多年草を活用しながら、ガーデンとして四季折々の花が咲くようにして楽しんでいただきたい。経費はそう多くかかることにはならないと思っている。

<福井委員>

ウェルカムガーデンやスポットガーデンは、大体何箇所ぐらいになるのか。また、地域の自治会等に管理いただくのに、大々的にやっていくのであれば、個々に交渉するだけでなく、ある程度の職務分担が必要になってくるのではないか。

<市長>

できれば管理協定のようなものを締結していければよいと思っている。亀岡市、緑花協会、民間団体、自治会、敬老会、ロータリークラブ、ライオンズ等と、場所に応じて締結しながら、市民参加による花と緑のまちづくりを進められたらよいと思っている。プロジェクト自体は、大学で具体的に構想を練っていただいている。1つは、亀岡インターを降りた辺りの緑地帯を、企業版ふるさと納税をいただき、京都府により整備いただく予定である。そこに、ウェルカム亀岡という丹波石の看板を、ライオンズクラブの寄附により設置いただく。もう1つは、亀岡運動公園に行く手前の石油店の交差点に、京都府管理だが草が生えているだけの角地があり、そこもあわせて実施したいと考えている。また、篠インターを降りて、国道9号までの間に、NEXCO西日本と管理協定を結び、メタセコイアの並木を景観づくりの一環として整備していきたい。また、加塚交差点の市庁舎の別館横で、ブロック塀のある歩道を広げることも含め、森の京都のイメージのウェルカムガーデンを造りたいと思っている。さらに、大井町の和食のさととJAの間の植樹帯に、桜並木を延長する取り組みもある。企業版ふるさと納税を3,500万円ほどしていただける予定であるので、平成29年度中に補正予算を計上し整備していきたいと考えている。

<福井委員>

庭づくりの趣旨はわかるが、後の管理費が心配だと言われる市民がたくさんいる。お金がかからない方法でやるということも含めて発信していただきたい。

<市長>

基本的に今ある緑地帯を整備するものであり、亀岡市としては、その管理費は今までから計上しているので、そう大きく予算が増えることはないと思う。市民参加により市民力を活用していきたい。

<小島委員>

「亀岡まるごとガーデンミュージアム」構想には、桂川市長らしさが出ている。しかし、沿道は車が通り、せつかくのきれいな場所でありながら、植込みの中にごみを投下されてしまう。このための啓発看板経費は上がっていないが、市長の思いはどうか。

<市長>

ごみについては、実は汚いところに集まってくるものであり、だからこそ、きれいにしなければならない。花が植わっている所にごみを捨てる人は少ないと思う。そこにごみを棄てられたら、早めに拾う必要がある。市民に関わっていただき、市民の目で、ごみの飛散を防いでいくことにつながっていく。今後、一定整った段階で、市民にもしっかり啓発できる体制をとっていかなければならない。思いはたくさんあるが、予算のこともある。申し出を内々いただいているが、企業版ふるさと納税をいただけるからこそできるものである。全体的な計画については、京都学園大学、京都大学、福井県立大学と連携する中で、夏過ぎには具体的に、今の内容にプラスアルファしたものが出てくる。議会に相談させていただきながら、市民にとって誇れるまちづくりの第一歩として、美しい景観やまちづくりに努めていきたいと思っている。

<木曾委員>

北海道の富良野に行ったときに、沿道の家がガーデニングをされていて感動した。地元で公園の花壇を造られている。私的な農園もラベンダー畑をつくられている。官民一体となったガーデニング、まちづくりをしていた。これはよい考えである。まちづくりは、市民が協働参画しないと達成できないと思う。このことが市長の発想だと思うが、富良野に行かれたことはあるか。

<市長>

北海道はガーデニング王国であり、富良野、恵庭等、花のまちづくりを進めている所が多い。公共施設が美しくなると、その波及効果で民間が花を植え、きれいにしていく効果があると聞いている。市内のNPO団体である、亀岡・花と緑の会がオープンガーデンをしているが、今年度からは行政も手伝いながら、民有地緑化で、より美しいまちづくりを進めている。行政が「亀岡まるごとガーデンミュージアム」をやることによって、それに触発されて個人の家が、花を植えるようになる波及効果に期待しているところである。まちが美しくなると、市民の意識も変わってくると思う。それに市民が関わることによって、自分たちがまちづくりに参加しているという思いを享受いただけるようになると考えている。

<木曾委員>

個人の家もガーデニングも大事である。車で通っても、ベランダにかけてある花がずっと続いていると非常に華やかで効果的だと思う。そういう部分を協力していただくことも大切だと思うが、ガーデニングはお金もかかって大変である。家のベランダにポットをつり下げただけでも変わってくると思うが、そういう構想は持っているのか。

<市長>

民有地緑化は、本来は緑花協会がやるべきことだと思っている。現在は、基金を財源として、小学校に入学記念樹を贈ったりしている。行政としては、民有地にお金を出すことはできないので、基本的には基金事業として、緑花協会を進めていきたいと思う。市民の意識を高めることが第一歩である。「亀岡まる

ごとガーデンミュージアム」構想の中で、市民の目に触れる所に木や花が植わって、美しいと思っていただければ、結果として自宅も美しくしようと思っていただくことにつながると思う。その波及効果を大いに期待しているところである。

<小松委員>

先週土曜日に、京都学園大学の森本教授の講演を聞いた。秋に答申を出されると聞いたが、これは中間発表なのか。

<市長>

市の景観講演会として、京都学園大学の森本教授に講演を依頼した。まだ中間発表はもらっていないが、それ以前に発表されたものである。森のステーションの薬草原に、森本教授の雨庭構想を入れながら、実現していく予定にしている。教授の言われたことが、形になっていくのではないかと期待しているところである。少しずつ亀岡は変わっていくということで、研究の発表テーマからお話しいただいたと思っている。

7

<菱田委員>

学校規模適正化の中で、別院中学校は南桑中学校に行く、という話になっているが、一部、亀岡中学校に行くということを市長は答弁されたが、その経緯は。

<市長>

別院中学校は、元々南桑中学校の分校という形で誕生した。この経過からすると、本来は南桑中学校に行くということがベースにある。しかし、教育委員会が地元に入って話をする中で、亀岡中学校へという意見が出たことを聞いた。今はバス通学されており、南桑中学校に行くのもバスということ考えた時に、選択肢として亀岡中学校があってもよいと私は感じている。最初から排除するのではなく、色々な議論をしていく中で、保護者の方々や子どもたちの選択に叶うものを、なるべく実現したいと思っている。

<菱田委員>

これは、ビビッドな問題であり、色々な意見を吸収する中で、うまくコントロールしていただきたい。要望とする。

<山本委員>

基本方針として、別院中学校が平成30年4月から編入する案を示して、各地域に入り説明していただいている。議論が足りない現状であると市長もおっしゃった。亀岡中学校に行きたい人もいるし、小・中一貫校にしたい人もいる。また、保育所も合わせて一緒にしたらよいという意見もある。方向性が決まっていない中で、学校規模適正化に伴う学校指定物品購入経費が上がっている。これは編入を希望されている保護者の声を聞いたということであったが、それは賛成の方のものである。色々な意見がある中で、この予算を上げられた真意をもう一度聞かせていただきたい。

<市長>

基本的に平成30年4月を目途に協議を始めている。この計画で進めていくとなれば、予算としては上げておくべきである。結果的に予算を使わないこともありうるが、段階的に計画を持って進めており、準備費用、学校の見学費用として上げている。まだ、地元で1、2回しか入っていないので、それだけでは理解いただけるとは思っていない。教育委員会は、自治会やPTAを中心に、

全体会議も含め、これから何度か協議しながら進めていくので、予算は計上したが、協議が整わなければ進行することはないと考えている。

<山本委員>

予算額は35万3千円だが、これは編入が決まったときに必要なものであるので、確定した時に補正予算を計上してもよかったのではないか。

<市長>

補正でもよかったと言われればその通りかもしれないが、当初段階から計画を持って進めなければ、物事は進んでいかないので、あえて当初予算で上げさせていただいている。

<木曾委員>

学校再編に向けて色々取り組まれているが、正直言って、地元との協議がスムーズにいつているようには感じていない。協議がうまく進んだ段階で、進めるということの大前提としていただきたい。

<市長>

地域の意見が大変重要だと思っている。結論を急ぐことはないと思っているので、校区見直しについても状況を的確に判断しながら、皆さんの意見を取り入れて、変えていくことも必要だと思っている。教育委員会には、柔軟、丁寧な対応をするように申し述べている。

<木曾委員>

3月中には判断しないと、平成30年の通学変更をすることは不可能だと思うが、今日はもう23日である。答弁いただいているように、この段階で理解いただけないということは、期間については一考する考え方はあるという認識でよいのか。

<市長>

東輝、詳徳ブロックについても、今は平成30年を予定している。現段階では、まだ議論しなければならないと思っているので、今すぐではなく、これを前提としながら議論していく中で、タイムリミットを過ぎれば延期せざるを得ないと思っている。

<木曾委員>

理解いただいている所も若干あると聞いている。テスト的にそういう所だけでも、編入することは考えているのか。

<市長>

柔軟に対応していかなければならないと思っている。地域が色々な形で分断されることにより、悲劇を生んではいけないので、しっかりと方向性を見据えた中で対応するように指示している。

<教育長>

今月末に、別院中学校、東輝中学校のブロック別協議会を開催する準備をしている。区域をどう割っていくかという議論をしていかなければならない。実施方法として、どの学年からどう動くかということもある。実施時期として、できる所からやるという方法もある。平成30年4月という目標を立てており、やり切ってしまうということもある。また、平成31年4月にするというところもある。そういうことも含め、ブロック別協議会で議論し、合意が得られたところで、学校を含め、地域には改めて説明に入っていきたいと考えている。

<木曾委員>

理解を示していただくためには、理解できる内容を説明するというのが当たり前のことである。それができないことが、この状況に至っていると思う。そこを十分に踏まえないと、地域が混乱するだけであるので、強く要望しておく。

8

<馬場委員>

①については、民間活力の導入を期待するという答弁であった。市長も吹田スタジアムの経過をご存知だと思うが、最初から民間活力で公的資金を入れずにやっている。そのスタンスと、最初から公共が買ってしまふスタンスは、市長の思いとは違うのではないか。

<市長>

吹田については、実質はパナソニックが関連企業から寄附金を募った。それはパナソニックの創業地が大阪にあるという環境があるからである。亀岡にそれだけの投資を民間だけでしてくれるところは、現状ではない。スタジアムを建設するにあたっては、民間の寄附を含めて受け入れる要素はある。具体的な案が示されてくれば、一定の話が出てくるのではないかと期待している。私が言う民間活力と融合した施設とは、公園の中では店を出すこと等について規制があった。今度の場所は、市街化区域の商業エリアであるので、民間投資をしやすい面があり、それによって亀岡のにぎわいをつくってほしいということをお願いしてきた経過がある。そういう意味での民間投資とあわせて、スタジアムが駅近くにきたからこそ、その周辺に民間によりホテルやマンションを建設されることを期待している。スタジアムによる相乗効果により、駅北や駅南にも効果が及び、地域に、にぎわいと商業的な活性化が促されるような期待を我々は持っている。それを民間投資と言っている。

<馬場委員>

吹田がその環境を持っているということについては異論がある。サポーターも含めた活力で存続していった話であるので、ぜひ理解していただきたい。

20億円の市債については、昨年10月に説明を受けた、亀岡市の財政状況及び今後の見通しのP5には「市債残高が増加傾向、市債の発効額抑制に留意が必要」と記載されている。その5カ月後に、20億280万円も市債発行しようとする事との整合性はどうか。

<企画管理部長>

市長答弁にもあったように、今回の土地取得に新たにかかる20億円については、基本的には、これを普通建設事業として計上し市債を全額充当するが、あくまでも市債制度を使うというのは、平準化するためのものである。中期財政見通しは、5年後を目途に計画を立てており、この20億円がどう作用するかをはかっていくものである。他の事業を取捨選択し優先順位をつける中で、予算ベースでは、平成29年度末に残高は2億5千万円しか増えない。今後の計画では、残高もだんだん減っていくこととしている。基本的には亀岡市の財政状況及び今後の見通しで掲げている文言とのそごはない。今後、財政健全化判断比率等を注視しながら運営していく。これによって、財政が大変な影響を受けるということではないと考えている。

<馬場委員>

平成28年度の市債残高が419億円であり、平成29年度は421億円ぐらいだということと理解してよいのか。

<企画管理部長>

基本的に臨時財政対策債を除く金額が記載されている。臨時財政対策債は、国が後年度の償還に責任を持つものであり、交付税で入ってくる。それを除くと平成28年度末では、272億1千万円となり、20億円も含め今後の5年間をはかるものである。その中で残高も減っていくものと説明した。

<馬場委員>

数字のマジックのようで非常に説明しにくい、理解しがたいと思うがどうか。

<企画管理部長>

中期財政見通しは、それぞれの時点で5年間を推しはかるものであり、予算編成をどうしていくかの資料となるものである。今後の5年間では、予算不足が28億円生じることとなっているが、歳入は確実な積み上げと、歳出は主管部の要求通りの積み上げになっているので、予算編成の中では優先順位をつけながら編成し、財政の危険性はないと思っている。基本的には、基金に依存する予算編成であり、常々言っているが見直しが必要である。市長が一般質問で答弁したが、行政の最適化という中で、今後、それぞれ事業を見直していくことで、起債残高を減らしていく。それぞれの健全化指標も上がらないように努めていくということで理解いただきたい。

<木曾委員>

14億円で土地を買った。また、20億円で新たに土地を買う予算が出ている。今回は、きっちりとした方向で結果を出さないと、大変なことになる。京都府公共事業評価に係る第三者委員会と環境保全専門家会議の結論を待つ事業執行するという決断を市長からお願いしたい。

<市長>

環境保全専門家会議と京都府公共事業評価に係る第三者委員会の承諾を持って、用地購入に入るということである。

<木曾委員>

今、国や地方自治体の土地問題に関しては、国民、市民はナーバスになっている。より慎重な取扱いをしないと、大変なことになっていく。市政の混乱を起こさない形での、最終結論をお願いしたい。答弁は結構である。

<三上委員>

駅北にスタジアムを持つことは、過去に栗山前市長時代に一度検討されたが、だめになった経緯がある。これについてどう考えるのか。

<市長>

その時点の判断については、具体的には知り得ていないが、聞くところによると、当時のスタジアムの規模が今の規模と違った。ものすごく大きかったということであり、キャパシティ的にそこに入らなかった。区画整理地内と、その向こう側の田んぼでは単価が違い、なるべく市民負担を減らそうということで、そういう選択になったと推察している。

<三上委員>

駐車場やサブグラウンドを含めて、70億円以上かかるということであった。景観や近隣住宅地に近いということで、やや影響があるという結論が出ている。部長は「存じ上げない」と答弁されたが、市長も知らないのか。

<市長>

私もその点は知り得ていない。

<三上委員>

あの場所の妥当性の経緯は、詳しく知っておくべきだと思っていた。もう一度精査いただきたいと思うがどうか。

<市長>

基本的には、キャパシティ的に合わないので、そこは外れたという認識である。その時点では、環境や地下水の議論はなかったと認識している。場所が従前の京都・亀岡保津川公園になったことにより、色々な課題が浮き彫りになってきて、その対応で今まで時間がかかったと思っている。

<三上委員>

そのときに周辺や景観への影響のシミュレーションを出されているが、市民や議会にもまだ出されておらず、不明瞭なことが引っかかっている。その時の議事録も見て把握していただきたい。

9

<木曾委員>

京都・亀岡保津川公園について、環境省、文化庁に対して亀岡市から要望されていると聞いている。これについては土地を取得しており、亀岡市が公園をつくるという方向は変わっていないと思うがどうか。

<市長>

基本的に、都市公園、総合公園として造っていく。

<木曾委員>

環境省、文化庁の意見や支援を待ってやっていくのではなく、亀岡市として、公園とする構想を一定の方向とし、それを前提に環境庁、文化庁に要望するのが筋ではないか。

<市長>

その通りであると思っている。しかし、市がそこにこういうものをつくるということを言った場合、環境保全専門家会議に色々な影響を与えることとなる。まだ、調査段階にあり、それを待って行動していかねばならないと思っている。要望はしている。具体的に亀岡市として、京都・亀岡保津川公園は、こういうものをつくるということは、差し控えているのが実情であり、理解いただきたい。

<木曾委員>

若干理解するが、そもそもそこにスタジアムをつくる計画であった。環境保全専門家会議から色々な影響があるということで、工法を変えたりして進んできた。スタジアムがなくなるということであれば、全く状況が変わってくる。そこを十分説明した上で、亀岡市は、環境と共生する都市公園を造りたいということであれば、環境保全専門家会議に指摘されるようなことはないと思う。公園をつくるのにあたり、この部分は環境省にお願いするということを、はっきりと言うべきではないか。そうでないと、14億円が無駄になる可能性がある。市としての考え方はどうか。

<市長>

環境と共生した、生物多様性を確保できる公園にしていかなければならない。スタジアムは移転したが、あそこにはこういったものが欲しいという思いはある。しかし、ハード面でこういうものを造りたいと言った時に、それに対する懸念をいただく状況となり、それも含めて環境保全専門家会議で色々な調査を

することになっても困る。アユモドキがいたことにより、状況が大きく変わってきたので、調査のあり方、状況を確認し、それを基にアユモドキや環境に影響しない形で、公園として有効に活用していきたい。

<木曾委員>

理解できる部分はあるが、このまま5年、10年と放置することはできない。決断の時期がいつになるかは別にしても、方向付けはしなければならない。環境保全専門家会議がどのような結論を出すかはわからないが、それとは別の問題だと思っている。整理し、もう一度内部で検討いただくようお願いしたいと思うがどうか。

<市長>

あの土地は、有効に活用していきたいと思っており、市としても必要なエリアだと思っている。環境保全専門家会議の動向も見ながら、検討して取り組んでいきたい。

<馬場委員>

1カ月となるのか1年となるのか、そのスパンはどのくらいになるのか。

<市長>

現段階で環境保全専門家会議の座長からは、基本的に調査には3年から5年程度かかると言われており、その状況を見ていくことになる。

<馬場委員>

3年、5年待つというよりは、環境保全専門家会議や保津地域アユモドキ保全協議会、また、市民に積極的に知見を求め、透明性がある中で、アユモドキを市民の宝にしていく方向性があってもよいのではないか。

<市長>

指摘の通りである。アユモドキを市の魚とすることとなる。市民の宝として守り、育てていくことを、市民と共有して取り組んでいく。それに伴い、状況も変わっていくのではないかと思っている。環境保全専門家会議、環境省、文化庁ともしっかり議論しながら、環境づくりに取り組んでいきたい。

<馬場委員>

アユモドキは市の魚、桜石は市の石ということか。

<市長>

そうである。

<福井委員>

京都・亀岡保津川公園にスタジアムを建設する議論があったときに、3つのゾーンとして、共生ゾーン、スポーツゾーン、憩いのゾーンがあった。これは現在も生きていますと本会議で答弁されたが、もう一度確認したい。

<市長>

スタジアム自体は場所を移転することとなったが、エリアとしてはそういう形で将来活用できたらよいと思っている。それは変わっていないと認識している。

<福井委員>

環境と共生するスタジアムであり、環境保全専門家会議が色々なことを言われるかもしれない。アユモドキの調査が終わるまでは、わからないということは理解するが、3つのゾーンは元々あった理念であり、この公園の元々の趣旨を亀岡市は守っていくことでよいのか。

<市長>

基本的には守っていくようにしている。

<福井委員>

それならば理解する。建物やグラウンドをつくることが言えないのはわかっている。環境と共生するスタジアムとしての公園であり、環境保全専門家会議の意見を聞かなければならない。元のゾーニングの理念が生きているということを書いていただければ、私としては確認ができる。

<市長>

市としてのスタンスは変わっていない。今後も調査の内容に従って進めていきたい。

<菱田委員>

共生ゾーンは国に所有・管理してもらってもよいと思うがどうか。

<市長>

今後、国との対話の中でそういうことになる可能性もある。環境の専門家からその必要性が訴えられれば、そのように要望していきたいと考えている。

[市長等退室]

12 : 35

[休 憩]

14 : 45

<事務局長>

午前中の市長答弁で、森のステーションかめおかに関して、野鳥の森の単価については、後ほど報告することとなっていた。これについては、平成28年度は坪単価で130円であったが、平成29年度は坪単価56円に引き下げられた。球技場については、平成28年度は坪単価330円であったが、平成29年度は坪単価291円となっている。野鳥の森の下げ幅は大きい。

《 委員間討議 》

<馬場委員>

京都スタジアム（仮称）関連事業経費、公園緑地整備事業費について、13.9ヘクタールを14億円で買収し、計画を立てていないのに、20億円で土地購入することについて、委員間討議をしたい。将来的な財源不足を危惧し、これを補うために、様々な福祉、教育の予算が見直されていると思う。

<三上委員>

京都スタジアム（仮称）検討特別委員会でも議論を積み重ね、検討してきたが、すべてが明らかになったとは思っていない。二度と同じ失敗はできない。拙速に市債20億円を計上しなければならないものなのか。

<福井委員>

全てが明らかにはなっていないが、予算を議決することに関しては明らかになっていると思う。京都スタジアム（仮称）検討特別委員会は、まだこれから続いていくので切り離して考えたい。しっかりと検討していこうと考えている。20億円については、財政指標が出されているが全てであるとは思っていない。根本的に亀岡市の財政状況が悪くなっていくのは、自明の理である。労働人口が減り、税収が厳しくなり、公共施設管理計画も立てて運営していくが、財政

的にはしんどくなっていく。コンパクトなまちづくりを考えないと、亀岡市を維持していけない。20億円のスタジアム予算を切って、どれだけの大きな影響があるかを考えている。単に福祉が削られるという考え方にはならない。

<菱田委員>

スタジアム建設に関わり、どれだけの京都府の事業が動いたのか。平成26年度に宇津根橋の架け替えが事業決定した。法貴バイパスも事業決定された。今後、亀岡インターチェンジに直結する国道372号バイパスが事業化されると思う。スタジアムの決定により、これだけ動き出しているのは、大変大きな事業効果である。今後、スタジアムを完成させ、亀岡の核として、にぎわいづくりをしていくという、大きな期待を寄せることができる。

<馬場委員>

新市長になって、補助金2割カットの方針が出された。亀岡会館や中央公民館が除却されている。様々な住民の願いを選択されることが必要であり、率直に疑問に思っている。

<木曾委員>

20億円の予算については、すべて理解できたとは思っていない。今まで亀岡市が進めてきた計画について、推進する発言をしてきた。今さら中止することとしてよいのかと悩んだ部分もある。しかし、予算を認めることにより、亀岡の将来がどうあるのかについては、財政状況は問題がないとの理事者からの答弁を得ており、これを信用せざるを得ない。20億円の執行については、慎重にあるべきである。これを条件としながら、納得せざるを得ない。

<山本委員>

学校再編に向けた関連予算について、丁寧な説明と地域の理解のもとで予算執行いただきたい。

<木曾委員>

慎重に取扱うべきである。市長からもそのような答弁を受けており、市としてもその方向になると考えている。推移をみていきたい。

<福井委員>

この予算編成の段階では、平成30年の統合を見込んでいたが、一般質問や予算特別委員会での答弁を聞いていると、目標はあるが意見を聞いていくとの答弁に変わってきている。補正予算計上でもよいとは考える。しかし、当初予算に計上しても、補正で減額したらよい。教育委員会の対話のあり方として、強引に進めることはよくない。

<木曾委員>

別院保育所の耐震工事に係る予算について、近年の気象状況を考えると難しい状況にある。事業執行については、慎重になっていただきたい。児童の安全を第一に考えながら、慎重に対応いただきたい。

<福井委員>

セーフコミュニティ推進事業経費について、全国初の取り組みであるので、ある程度納得できる。インターナショナルセーフスクールについて、業務が煩雑になるからとの答弁であった。小学校1校と保育園8園等については実施したが、3年で事業を終了していくことである。

<馬場委員>

労働実態からみることは重要である。人的配置がしっかりされているのか。教

員が配置されていたのが、体制が弱まっている。本市の保育所の職員も嘱託職員が増えてきている。労働条件は他市と比してもよくない。

<三上委員>

認証に向けた事務を軽減し、前回認証された内容をより発展させ、他校への発信、共有はゆとりを持って実施することで、全市に波及するのではないか。このため、認証にこだわる必要はないのではないか。やったことを振り返ることができないほどの仕事量が小学校や中学校にもある。このことからあまり有効ではない。実をとり、子どもたちに行きわたるように、作業にゆとりを持てるような方向になればよいと考える。

<福井委員>

執行部の説明も理解できていない。現実に実施して成果が上がっていることを、市内に広げられるのか広げられないのか。市長もインターナショナルセーフスクールは、再認証後に考えていくと答弁されている。

<奥野委員>

セーフコミュニティの実施校が増えないのは、事務が煩雑になるからということであった。亀岡市が全国に先駆けて実施し、本来は他市にまでも広げていくべきでだと考える。そこまで広がらないのは、PR不足であるのか、それほどよくないということなのか。

15 : 10

【討論・採決】

≪討論≫

<馬場委員>

第1号議案、平成29年度一般会計予算について反対する。駅北の土地区画整理事業用地を、京都スタジアム（仮称）建設用地として、京都府が13億円、亀岡市が20億円、総額34億円で購入しようとしている。環境保全専門家会議で調査の時間がかかると言われている場所を購入することはいかなものかと考える。施設整備事業債として20億280万円を計上し、今後償還していくこととなる。少子高齢化の中において、本市の歳入欠陥が予測され、問題が多いと考える。サブグラウンドや駐車場用地を確保しなければならないことについては、市長は京都府と協議すると言われている。そもそも、京都府の事業に用地提供させ、基礎自治体に財政負担を負わせること自体、疑問に思う。第1号議案、平成29年度一般会計予算について、修正案を提出する。

<奥野委員>

第1号議案、平成29年度一般会計予算について賛成する。財政状況が厳しい中、特に京都スタジアム（仮称）関連予算については、亀岡の未来を照らす希望ある事業である。

<木曾委員>

第1号議案、平成29年度一般会計予算について賛成する。桂川市政2年目の本格的な予算編成となった。市民力で未来を拓く、選ばれるまち、住み続けたいまちを目指して編成されている。特に、子どもたちの夢や希望を叶える、亀岡のまちがにぎわうための予算編成となっており、賛成する。新たな魅力づくりについても、随所に魅力あるまちづくり予算の編成となっている。

<山本委員>

第1号議案、平成29年度一般会計予算について賛成する。第4次亀岡市総合計画後期基本計画を着実に進めるための予算であり、財政状況が厳しい中であるが、選ばれるまち住み続けたいまち亀岡の実現をスローガンに、地方創生交付金やふるさと力向上寄附金等を活用し、スタジアム以外にも子育て支援や教育環境の充実、地域の魅力づくりに取り組むための、積極的な希望のある予算編成となっていることは評価できる。学校再編の関連予算については、丁寧な説明と納得を得る中での予算執行としていただくことを要望する。

<菱田委員>

第1号議案、平成29年度一般会計予算について賛成する。市長質疑に対する答弁を受けた。市民力で未来を拓くまちづくりへの思いが伝わってきた。スタジアムに関して、様々な質疑があったが、的確に答弁をいただいたことは、市長の思いが入った予算であると認識した。セーフコミュニティや観光推進経費については、年限をきって事業を進めるとの答弁もあり、評価する。

《採決》

賛成多数（反対：三上、馬場）

《指摘要望事項》

<木曾委員>

別院保育所の耐震工事に係り、近年の異常気象の状況から考えると、災害対策については、児童の安全を第一とすること、学校規模適正化については、地域の意見を十分に聴き、慎重に進めること、京都スタジアム（仮称）関連事業に係り、公共事業評価に係る第三者委員会及び環境保全専門家会議の判断を待ち事業執行すること、以上3点を指摘要望としたい。

<西口委員長>

それぞれ、指摘要望事項とすることでよいか。

—全員了—

<西口委員長>

文言の整理は、正副委員長に一任願う。

—全員了—

《議会だよりの記事に関する協議》

<西口委員長>

議会だよりの記事に関して意見はないか。

<木曾委員>

正副委員長でまとめていただきたい。

<西口委員長>

正副委員長に一任願う。

15 : 28

【閉議】

[副委員長 あいさつ]

[副議長 あいさつ]

<西口委員長>

予算審査を終了し、散会する。

15 : 30